

淡路島プロジェクト

有川菜々美, 橋本卓磨 ((株) ooc), 三田村哲哉

キーワード: 建築, 施設, 設計, 提案, 協働

1. はじめに

建築は施主, 設計者, 施工者の3者の協働で建設されるものである。淡路島プロジェクトでは, これらの3者のうち, 施主と設計者の間に, アドバイザーの役割を果たす建築家が介在することによって, 建築の提案において新たな一面を開拓することを試みたものである。

建築には必ず敷地があり, その土地の気候や地理, 風土や習慣など, それぞれ地域特有の事情が設計に非常に大きな影響を与える。本事業の目的は, 通常, 建築設計は施主と設計者の2者で進められるものであるが, その間にその土地を深く理解したアドバイザーが入ることによる新たな変化を期待するものである。

2. 施主, 設計者, アドバイザー

本事業の試みは, 卒業設計の作品という形で実現した。施主に相当する役割を果たしたのは, 食関連事業を主要業務とした沖物産(株)社長村上俊二氏, 淡路市役所農地整備課元木陽介氏, 北淡路土地改良区山口哲史氏, ハートスフードクリエーツ(株)社長/CEO 西脇章氏で, 設計者は本学4年生の有川菜々美である。

一方, 今回の鍵となるアドバイザーを務めたのは淡路島・志筑地区の建築家, 橋本卓磨氏である。橋本氏は本学を卒業後, 京都工芸繊維大学大学院を経て, ウィーン工科大学に留学し, 現在東京大学大学院に在籍し, デザインオフィス nendo を経て, 同地区の建築設計事務所(株) ooc 代表を務める建築家で, 企画・設計・運営という一連のプロセスを監修しながら空間設計を軸とした表現の実現を試みるという, 建築の領域を超えた幅広い業務に参画する建築家である。また同氏は淡路島・志筑地区の出身で, 同地区の建築に精通し, 数々の実作を残すばかりでなく, 本学の授業科目である建築デザイン演習の非常勤講師などを務めており, 学生の理解という点でも適任者であった。

3. 課題と敷地

淡路島は, 南あわじを中心に玉葱, レタス, キャベツ, 白菜などの多毛作や, 水稲と畜産の組み合わせによる生産循環システム, 連作障害を防ぐ仕組みなどに基づいて2021年に「南あわじにおける水稲・たまねぎ・畜産の生産循環システム」として日本農業遺産に認定された。しかし同地の農業に課題がないわけではない。

こうした農業に関する総合的な役割を果たす, そのなかでも特に, 従事者に焦点を当てた施設の検討が, 本事業の主題とされた。そのため, 敷地は村上氏および橋本氏の提言に基づいて, 淡路市北淡 IC 付近の海辺に面した場所が選択された。

4. 検討の経緯

本事業は設計者, 施主, アドバイザーの3者で検討を介した点に特徴がある。まず第1回オンライン会議(日時:7月31日水曜日, 参加者:橋本氏, 有川)が開催され, 農業と観光と災害の3者を主題とする建築の提案が求められた。有川は第1回現地訪問(日時:9月6日金曜日, 場所:沖物産(株)本社, 現場, 参加者:村上社長, 橋本, 有川)で「農業と観光」を主題にプレゼンテーションを行い, 淡路島の農業の現状に関する解説と, 候補地の紹介を受けて, 現地を訪問した。

有川は第2回現地訪問(日時:12月6日金曜日, 場所:北淡路土地改良区, 参加者:元木氏, 山口氏, 有川)で淡路島の土地利用全体から見た島内北部の農地に関する取材を行い, 候補地の課題を精査した。また淡路市が推進している農業関連の各種事業の紹介を受けた。第3回現地訪問(日時:12月14日土曜日, 場所:野島常盤集会場(地域餅つき大会), 参加者:西脇氏, 元木氏, 地域農家, 有川)で, 有川は実際の農業従事者に対するインタビューを行い, 淡路島の農業に関する考察を深めた。第2回オンライン会議(日時:12月18日水曜日, 参加者:橋本氏, 有川)で, 有川は最終案の道路側立面と建

築用途の異なる複数棟をひとつにまとめるという設計主旨との乖離が見られることを指摘された。

5. 第1案（2024年11月27日）

標題は「文化をカタチにして残していくー淡路島の『生産循環システム』の継承」で、提案は農業事務所および資料館、農業学校および宿泊施設を組み合わせた施設であった。このうち前者の異なる用途の施設の空間と動線に、淡路島特有の生産循環システムのつながりを参照した点に特徴がある。課題は前者の2施設と後者の2施設が分断されたことと、前面道路に面した建築の正面が形成されていなかった点にある。

また後者の2施設については、わが国でも未だ稀なビルディング・タイプで、必要諸室やその面積、空間のつながりという点に課題があった。

6. 第2案（2024年12月23日）

本案の検討の対象は、農業事務所および資料館の棟であった。資料館は廃案になり、集会場を中心とした施設の提案に変更した。アドバイザーの提言に基づき、外来者の関心よりも、むしろ当地の住民や従事者を対象とした施設への転換が求められたからである。また農業学校および宿泊施設の棟は、隣接する農地不足に関する指摘に基づき、同学校の平面形状を変更し、農地の増加を図るとともに、両棟の合理的な配置計画に変更した。その結果、2つの敷地に分割された2棟を連結するために、道路側の立面の造形を再検討し、大屋根と列柱を組み合わせる形作ったホワイエとそのファサードを提案した。この連続した屋根と列柱は、複数の用途からなる多数の棟をまとめる造形面の役割を果たす。

7. 第3案（2025年1月23日）

有川はアドバイザーより、敷地内に点在する複数棟をひとつにまとめるという設計主旨の下、ホワイエを提案し、こうした側面を強化したが、ホワイエの役割の提案不足を指摘されたため、これまで閉鎖された会議室を開放して、両者を連結し、ホワイエを中心とした開放的な施設への転換が図られた。アドバイザーによる土地の理解に基づいた提言が本案の改善に大変大きな役割を果たしている。



図1 宿泊・研修施設の提案

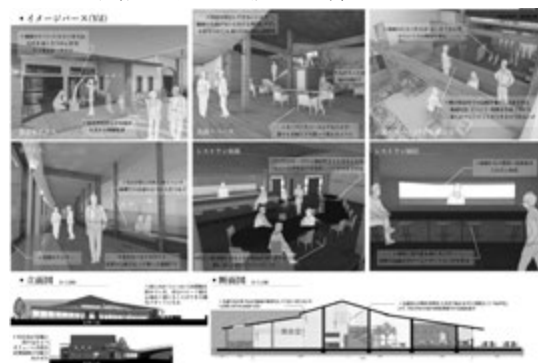


図2 集会場・会議室・レストランの提案

8. おわりに

建築は戦間期、合理主義や機能主義に基づく国際様式を中心としたモダニズムに傾倒し、世界各地で一様に整備されるようになる。こうした建築に対する反省が1960年代半ばに起こり、歴史や場所を尊重したポストモダニズムの建築が出現した。

本事業のアドバイザーの設置はこうした背景を踏まえると、歴史や場所を尊重した提案で、むしろポストモダニズムに傾倒した姿勢に基づく。このような観点は、卒業設計で提案された施設の建築造形そのものに現れた。今日の建築に必要な合理主義と機能主義ばかりでなく歴史と場所を尊重した建築とは、本来どのようなものか、提案はこうした観点について設計者の役割を果たした学生と、アドバイザーを務めた建築家が議論を重ねた成果である。

謝辞

本稿の執筆に当たり、沖物産（株）社長村上俊二氏、淡路市役所農地整備課元木陽介氏、北淡路土地改良区山口哲史氏、ハートスフードクリエイツ（株）社長／CEO 西脇章氏、多数の方々にご協力を得た。記して謝意を表す。